

野尻抱影先生を囲む会

大崎 正 次

野尻先生の満90歳のご長寿をお祝いして、先生を囲む会が、去る11月30日東急文化会館ゴールデン・ホールで開かれた。野尻先生といえば、わが天文学の世界では、だれ一人知らぬ者のない最長老であり、大先輩である。50年以上にわたって、つぎつぎと著わされた数々の名著を通して、星の世界にすいこまれた人々はどれほどの数にのぼるだろうか。あるものはその道を突き進んで専門家になり、あるものは星を生涯の友として、それを知らぬものとは別の豊かな人生のよろこびを得た人となったはずである。先生のご長寿を祝って集まった人々が、何よりもそれをあかしていると思われる。たまたま国鉄ストの最中でありながら、遠くは九州から飛来、また信濃から車で馳せ参じられた方々、近くは3代にわたる東京天文台長、東大天文学科のもと教授、東京天文台勤務のバリバリの現役、国立科学博物館の天文担当官、それに加えて、アマチュア天文家としては、もはや星と心を通じつつある年期の入ったOBの面々、それに創立以来野尻先生のご指導の下に天文知識普及の第一線に立っている五島プラネタリウムのメンバーたち、それらの方々の参会によって、まことに楽しく和やかな饗宴がくりひろげられた。参会者が心をこめて口々にのべられたことは、先生のご長寿に対する通りいっぺんの祝詞ではなく、長年にわたる専門家も及ばぬ天文学一般についてのみごとな解説、いつも若々しく情感の溢れた珠玉のような天文隨筆、さらにはかくれていた星の和名の蒐集、星にまつわる古画・彫刻を新しく見なおされたことなど、天文学の世界だけでなく、民俗学や美術史学界にまでに及ぶ

貴重な学問的な業績を、かわるがわるたたえられた。90歳をこえられた今日もお、現役の天文家としてカクシヤクと著述にはげまれておられることへの驚嘆と、羨望にも似た今後のお仕事への期待であった。先生は米寿の年に新著1巻(日本星名辞典)、昨年11月15日には満90歳をこえられながら、この日の数日後に、またそれも書き下ろしの新著を脱稿されたとのことである。日本出版史上においても特筆すべき超人である。この日某氏の問いに答えられた、先生の長寿と息の長さを秒訣ここに披露させていただくと、それはまず快通と安眠、そして多年にわたる文学修業を通しておのずから学び得た一大事ニ際シテモ、一步すり抜けてこれを客観視すること、つまり今更ニ驚ロクベカラズと自らにいきかせること、この三事だった。この夕、よせ書きの色紙に、先生がしたためられた句は、<さい果ての星の旅路もまだ尽きず>。終りにこの次に迎える99歳白寿の祝賀会を開くことを一同期待し、約束して万歳三唱、記念撮影ののち、名残りを惜しみながら散会した。なお当日の参会者は、野尻先生のほか、宮地政司・鏑木政岐・藤田良雄・廣瀬秀雄・古畑正秋・富田弘一郎・村山定男・小山ひさ子・坂上務・草下英明・小森幸正・今井正明・大崎正次・竹内泰子・青木正博・原恵・佐久間精一・木村精二・山本忍・水野良平・小田泰正・大谷豊和・小林悦子の諸氏であった。なおこの会については、五島プラネタリウムから多分のお世話とご援助をうけたことを記し、厚く御礼申し上げます。

書 評

An Atlas of Light Curves of Eclipsing Binaries

Mario Fracastoro

Osservatorio Astronomico di Torino, Pino Torinese,
Italia 1972. U.S. \$17.50 (又は Liras 10,000)

著者はイタリアのカターニヤ天文台の前台長であり、現在はトリノ大学天文学教室の主任教授である。このアトラスは、66個の代表的近接食連星について従来発表されている光度観測データの1つ1つをプロットして光度曲線を書き直したものである。実視領域の光度曲線が62個、青色領域47個、紫外15個、赤色または近赤外が2

個で、全部で126個の光度曲線からなっている。こと座β星、ぎょしゃ座ε星、ぎょしゃ座ζ星などの有名特異食連星が含まれていないのが残念だが、現象としての“食変光”の全様相を見ることができる。これら光度曲線によって、現在の光電測光による変光観測の一般的精度を見てとれるばかりでなく、アルゴール型・こと座β型・大熊座W型という古典的分類にしたがって、連星を構成する両星間の接近度と光度曲線上に現われる反射効果や楕円効果(形状歪曲の影響)の推移の関係が一目瞭然に分って面白い。また、フリッカリング、ガス流による擾乱、ガスリング上のできるhot spotなど最近問題になっている特異現象による光度曲線のゆがみも見られる。このアトラスにより著者 Fracastoro は、“光度曲線のあるものは自然がセットした魅惑的な問題(近接食連

星の問題)の解決の糸口を引出すための一助になる”ことを願っている。(北村正利)

惑星と生命

宮本正太郎著

(講談社ブルーバックス, 新書判, 314頁, 560円)

「生命の誕生する星を求めて」という副題がついている。これだけを見て著者の名を見なければ、人は或いはSFのたぐいかと思うであろう。事実は無論そうではなくて、極めて堅実な実証科学の書なのである。

7章から成り、第1章“太陽系の発見”と第2章“恒星と惑星”とは天文学と天文学史との概説である。いわば本論にはいる前の導入部分であるが、ここにも著者の科学観が躍如としていて、読みつつ正しい天文学へと導かれる感じがする。

第3章“太陽系の大惑星”と第4章“地球型の惑星”とで惑星学の一般論が、第5章“太陽系の原物質”で、小惑星、隕石、彗星、流星が語られる。最近では太陽系天体に関するいろいろな情報が、疑わしいものも含めて諸方に氾濫しており、取捨選択に迷わされるが、本書のようにわかり易くしかも理路整然と解説されると、まことに安心して読むことができる。著者が自から徹底的に研究し理解しておられるからであろう。

第6章は火星で、これは著者が最近最も心血を注いでおられる研究項目である。火星の気象現象などについての独自の理論も語られていて興味深い。また、火星には生物が育っている可能性があり、しかもそれは現在の地球上では亡びてしまっていることのできない原始的な生命の形態であり、原始的で簡単な構造のものであればあるだけ生命の謎を解くよい資料になるとあり、深い興味を覚えざるを得ない。

この章と最後の第7章“地球と生命の歴史”とが本書の眼目である。生命については、原子の構造からはじまり、炭素化合物の多様性や、核酸、DNAの構造も解説される。併せて地球の表面の地質進化、生物の進化と人類文化史等々、多様な科学諸分野が語られる。それが単なる雑学としてでなく、渾然融合した形であるのは、この著者にしてはじめてなし得るところであろう。

人類の将来については、農業という食糧生産手段の非効率を批判し、もっと知性を働かせて食物を合成するなどの高効率的手段を開発すべきであると説く。また我々はようやく遺伝子の持つ暗号を解読しはじめたにすぎないが、将来この知識の発達を悪用すべからざることを力説する。爬虫類の腕力主義に代わって、人類は知能主義によって生きのびるように運命づけられており、今までのところそれは成功しているように見えるが、将来と

も知性が人類みずからを亡ばさないように、との警告もある。

まことに感銘深い本で、広く一読をおすすめしたい。

(大沢清輝)

暦と日本人

内田正男著

(雄山閣出版株式会社刊, 226頁, 680円)

先年勤務先の学校で運動会の日程をきめたとき、PTAの1人が暦をみないできめるのかと発言した。私はあけにとられて運動会の日程迄暦を気にしていたのでは一体いつ運動会が出来るのかと持前の大声を出したことを覚えている。考えてみると暦注にまつわる迷信もここ迄きたとなると全く笑いごとではないと思うのである。その年の方角が良くなる迄別居する夫婦の話や、高校教師が三隣亡に建てた隣の家をこわした話(朝日新聞)など暦注にまつわるこの種の話は枚挙にいとまがないであろう。改暦百年を機として出された暦に関する書物のうちいくつかは読んだが本書は実例に示したような現実に対する一般への啓蒙書として最適なものであることを信じて疑わない。

本書はまずお日柄の話から入り5項目にわかれている。1)では六曜を中心とする歴注について特に大安、仏滅が如何に根拠のないものかを豊富な実例をあげて実に面白くかかれてあり、2)では昔のお日柄という見出しのもとに改暦前即ち明治5年の旧暦を材料とし昔の暦注を解り易く解説している、干支、二十八宿(本来は季節を定める方法であったがやがて暦注としての意味になる)八將軍歳徳と金神、鬼門、十二直、三隣亡、等々こんなにも吾々は暦注という迷信でがんじがらめにされているのかと今更ながら思う。3)では暦注批判いろいろとして、中井竹山、山片蟠桃の卓見をあげ特に蟠桃の科学的識見と近代歴史学の立場からみた日本の暦の見方を高く評価し浄潔の暦の話に及んで興はつきない。4)の異色暦注と非暦注では二十四節気のように純然たる暦学上(非暦注)のものや九星などの暦注について話を面白く展開している。最後の5)実説余話の話の中には私共の知っているものもいくつかはあるが数多くの余話を極めて豊富な資料をつかって面白くまとめ、この項だけを一冊の読みものとして読んでも充分読者を楽しませてくれる迫力をもっている。

なお本書15夜の話で仲秋名月とある。旧暦8月の「仲秋」は正しいが8月15日の名月は「中秋」名月とにんべんを取らなければならないはずである。

本書にもあるように、明治5年11月改暦の布告にあたり完全に禁止された暦注がいつの間にか再び姿を現し21

世紀を迎えようという今日においてなおこのような迷信たる暦注がますます人の心を捉えてゆくのは如何なる理由によるのであろう。人間疎外の現代社会における不安への慰みを暦注に求めようとしているのであろうか。情報社会における無批判が又これを助長するともいえず。又日本歴史の長い過程において暦注が常民の間になぜこれ程迄にしみ込んできたのであろうか、これは天文月報 Vol. 68, No. 4 で大崎正次氏も指摘されたように単に暦学の面からのみ見るべきでなく、特に民俗学、文化人類学等の面からの見方が必要であろう。これらを思うと本書の著者が念願する迷信としての暦注打破の道は誠に険しい。戦前私は新城新蔵博士の名著「迷信」をもとに機会ある毎に話をして父母、一般の理解を求めたことがあるが今回も早速この本をもとにしてPTA成人学級で一席打ったところその反響が誠に大であった。本会には教職にある方、プラネにお勤めの方など科学普及の道にたずさわる方々の数は相当多いと思う。そのような方々にぜひ一読をおすすめし共々に世人啓蒙の道を歩みたいと思うのである。

(箕輪敏行)

学会だより

春季年会について

今春の年会は5月18日(火)から21日(金)までの4日間、東大理学部2号館(本郷構内・赤門脇)講堂で開催の予定です。

講演申込みは、『〒181: 三鷹市大沢 2-21-1 東京天文台 中桐正夫』あてに3月19日までに必着するよう、規定の申込み用紙を用いてお送り下さい。

申込み用紙は、支部理事へまとめて送ってありますので希望者は返信料50円を同封の上、下記の理事へお申し出下さい。

記

- 北海道: 坂下志郎 〒060 札幌市北八条西5丁目
北海道大学理学部物理学教室
- 水 沢: 笹尾哲夫 〒023 水沢市星ガ丘町 2-12
緯度観測所
- 仙 台: 竹内 峯 〒980 仙台市片平 2-1-1
東北大学理学部天文学教室
- 東 京: 中桐正夫 〒181 三鷹市大沢 2-21-1
東京天文台
- 名古屋: 松本敏雄 〒464 名古屋市千種区不老町

わが国唯一の天体観測雑誌

天文ガイド

定価240円(〒45円)76—4月号・3月5日発売!

●4月号のおもな内容

- ★4月は水星が観望の好期になります。コペルニクスもとうとう一生の間見られなかったという惑星です。ぜひこの際見たいですね。しかも夕方西の空ですから条件はグーです。わかりやすガイドもあります。
- ★秋から冬にかけて宵の空に輝いていた木星も、新衛星の発見など数々の話題を残して西の地平線に去ります。
- ★昨年11月、岡山地方の人たちを驚かした大火球は隕石の落下と考えられています。いよいよ海底をさがして引きあげようという大捜索がはじまります。そのようすをグラビアでご報告します。★惑星をたずねて<IV>
- ★ユニバーサル・シーリーチユープ望遠鏡の作り方など

火星

パトリック・ムーア 共著
チャールズ・A・クロス
斎田 博訳

火星には運河がある、火星人がいるらしいなど、この星は昔から話題の豊富なロマンに満ちた惑星です。宇宙探査船マリナー号は、火星の上空をまわり多数の写真を撮り、観測をして、地球へ送ってきました。本書はアメリカ・ソ連の最新の情報、資料を使って描き出した火星の紹介です。運河はないのか?火星の極冠は水か炭酸ガスか? ●A4判・2800円・好評発売中!

星のふるさと

星と空を愛する一主婦の体験をまとめた小さな本です。第一部「炎上の火星」は、コンビナートの炎の上に昇る火星を観測したさいに、観測ノートに記した美しい星空への願いです。第二部「星のふるさと」は、少女の頃に星と親しむため、あの星、この星との出会いを短い文につづつたしおりを、構成したものです。ユニークな読物形式です。 ●鈴木壽壽子<文>・B6変・550円・好評発売中

誠文堂新光社 東京都千代田区神田錦町1-5
振替東京6294 電話03(292)1211